紙芝居

「つなみ」

絵・文　田畑ヨシ

（原文を一部現代仮名遣いなどに修正して掲載）

よっちゃんの住んでいる村は
青い青い海と
白いどこまでもつづく
長い砂浜がありました

きれいな川がながれ
町のなかはしずかで
ときどき
荷馬車がカタコトカタコト
音をたてて通る
しずかな
しずかな村でした

よっちゃんのお家には
白くて長いおひげをはやした
おじいさんがありました
おじいさんは　いつもよっちゃんに
津波のお話をしてくれました
明治29年の津波に流されて
たった一人ぼっちで助かった
おじいさんでした
いつかきっとまた
津波がくるのだからな
大きな地震が揺(ゆ)ったなら
一人でも裏の赤沼山に逃げるんだよ
大きな山のような波がきて
さらわれるんだよ
おじいさんは津波のとき
逃げなかったので
家の下になって流され
気がついたときはざ・ん・が・い・や・ら
ごみのなかに埋(う)もっていて
ようやくざんがいのなかから
はいだしてみたら
見渡すかぎり家はなく
中田(なかた)部落の吉川(きつかわ)さんのお家まで
たどりついて
お世話になって助かったものだと
いろりの前で煙草(たばこ)を吸いながら
話してくれました

よっちゃんは
津波のきた夢をみました
お家にある
あの大きなかまどのうえに
あがって助かった夢でした
あぁーそうだ
津波がきたら
山に逃げなくても
あのかまどの上にあがったなら
助かるだろうなあーと
いつも思っていました

三月三日のおひなまつりの
夜でした
よっちゃんは
おばあさんと寝ていると
ガタガタと
大きな地震が揺りました
よっちゃんはとび起きて
おばあさんと　はだしのまま
赤沼山の下まで走っていって
ぶるぶるふるえていると
お母さんが妹をおぶって
「おばあさん、よし子ー」と
大きな声でよぶ声がして
「電気もついたし
家に帰っておいで」と
迎えにきたので
お家に帰ったら
いろりには大きな火がもえて
しんせきのおじいさんがきて
明治29年のときの
津波のことを話していました

よっちゃんが
こわくてぶるぶるふるえていると
おばあさんが
「寒いならこの袖なしでも着て」と言って
長い毛皮の袖なしを着せてくれた
おじいさんは
「津波がくるかもしれないから
逃げる準備をするように」と言って
お父さんは、たい松をたばねておき
わらぞうりをみんなのぶん、玄関にそろえて
大切なものをカバンに入れて
持って逃げるばかりに準備をしておりました
しんせきのおじいさんは
「井戸の水も川の水もひけないから
津波はこないだろう」と言って
のんきに話していました
すると、まもなくまた地震が揺り
お父さんが「津波だにげろぅ」と
大きな声でさけびました
海の方から
ドーンと大きな音がしました
よっちゃんは
むちゅうになって玄関のぞうりをつかんで
はだしのまま走ったが
長い袖なしが足にからまって
なんかいもなんかいもころびながら
赤沼山に逃げました

よっちゃんは
赤沼山にむちゅうになって逃げたが
畑にかきねがあって
飛びこえることもできないし
下からかきねのあいだをくぐろうと
いっしょうけんめいにもがいていると
大人の人たちは
よっちゃんの上を飛びこえてゆきました
「ここで波にさらわれるのかなあ」と思って
いつもおばあさんが地震のときとなえている
マンザラク、マンザラクととなえて
ようやくかきねをくぐって畑にでました
逃げた人達はみんな
家族の名前をよんでいました
「お母さん、お父さん」などとさけんでいます
よっちゃんもこころぼそくなり
大きな声で「おばあさーん」とさけんだら
すぐそばにおばあさんと兄さんと姉さんがきて
安心しましたが
おじいさんが年寄りだからと心配になり
おじいさんをよんでもみえないので
そのままうしろ山のてっぺんまでのぼって
朝になるのをまっていると
湯屋のおじさんがきて
「お母さんが足を両方けがをしている」と
おしえてくれました
兄さんはおじさんについてゆきました

「早く夜があけるといいなあー」と
思っているうちに
だんだん明るくなり
山からぞろぞろ
お寺のお墓道をおりてみると
みんな家はなく
海だけが
高く青くすんで
ざんがいと、いやなにおいが
していました
お寺の前には
なんにんも
けがをした人達がうめき
流れた人が
参道にこごえて死んでいる人
よっちゃんは
「田老はもういやだ
海のない所にゆきたい」と
思いました

よっちゃんのしんぱいした
おじいさんは
いつのまにか
お寺の本堂の前にすわり
げたのはなおのない物を
たくさんつんで
わらを手でいっしょうけんめい
なっていました
おじいさんは
なにをするのかなあとみていると
げたにわらでなったおをたてて
はだしのまま逃げた人に
あげておりました
「おじいさんはえらいなあー」と
思いました

お寺のくりのなかに入っていったら
お母さんは
足を両方白いきれでまいて
こたつに　よこたわっていました
「よし子、母さんはこんなになったよ」と
言ってみせてくれました
よっちゃんは
たまらなくかなしくなりました
お父さんもお母さんを助けようとして
腰をいため歩けなくなったと
おばあさんが話してくれました
遠くのしんせきの人達のくるのをまって
お母さんを戸板にのせて
4人でかついで
山道を宮古の病院まではこんでゆきました
お母さんはおばあさんに
「子供達をたのみます」と言って
涙をながしていました
よっちゃんは
お寺のかいだんのうえから
お母さんのゆくのをじっとみながら
なきたいのをがまんして見送りましたが
なみだをこらえたら
とてものどがいたくなりました
心のなかでよっちゃんは
「海のバカヤロー」と
なんかいも　なんかいも　さけびました